

## 主体を明らかに

〜四月二十八日という因縁〜

《四月二十八日》と言えば、建長五（一二五三）年の四月二十八日です。日蓮聖人が『立教開宗』なされた日であります。その御聖日にちなみ真成寺では『毎月二十八日は祈りの日』として、団扇太鼓を打ちながら「南無妙法蓮華経」と唱え平和を祈っています。

そんな事を考えていたら、今回被災され、亡くなられた方々の四十九日忌に当たるのが、なんと、日蓮聖人が立教開宗された『四月二十八日』と同日だったのです。偶然にしては、何か神仏からのメッセージの様な気がします。

また、日本が第二次世界大戦で昭和二十（一九四五）年八月降伏し、敗戦国となり、アメリカの属国となりました。その後、日本はサンフランシスコ講和条約を締結し、昭和二十六（一九五二）年の九月に調印、翌昭和二十七年四月二十八日発効、占領が終了しました。

つまり、日本が独立宣言をして復権を回復し、占領国から晴れて独立国と認められたのが、これが奇しくも『四月二十八日』だったわけです。これらの符合は『たまたまの偶然』という事で片付けてはいけないように思います。私は敢えて言います、神仏様や日蓮聖人からのメッセージであると、断言しておきましょう。

ところで『立教開宗』とは何でしょうか？千葉県は清澄山頂より、昇り来る旭日に向かって日蓮聖人が、『南無妙法蓮華経』と声高に唱え、『我日本の柱とならむ。我日本の眼目とならむ。我日本の大船とならむ』と、立教の宣言と伝道の誓願を立て、名前を『日蓮』と改名されたのです。また、この瞬間をもって法華経を最上の教えと仰ぎ信仰する宗派、日蓮宗が創設されるきっかけとなつていくのであります。まさに読んで字の如く『教えを立て宗派を開く』立教開宗』となります。日蓮聖人はこの時、三十二歳。法華経に全ての答えがあると確信を得た日蓮聖人は、この宣言を境に、求道者から救済者へとなつていかれたのであります。※当初日蓮聖人自身は、『日蓮宗』という宗派を創設するつもりは無く、現在

にまでいたる私達の『日蓮宗』は、後の弟子達によつて組織作られていたのであります。日蓮聖人ご自身とすれば、あくまで法華経という教えを、一人でも多くの方々に伝え、信仰して頂く事が、日本人の精神を改心することになり、ひいては国全体が安穏で平和な場所（極楽世界）になるものという強い確信とも言える様な信念が、発心となつた誓願だったのであります。

そもそも日蓮聖人は、なぜに『ご自分が日本の旗印になろう』と宣誓されたのでしょうか？当時の日本国は大災害、天変地異、飢饉や内戦が絶える事なく、おびただしい数の死者や病人が街中に溢れかえり、まさに地獄絵図さながらの光景が繰り広げられていたというのです。そんな惨状を目の当たりにされるにつれ、日本国には正しい信仰が定まっていない。このままでは日本国に餓鬼畜生の類がはびこり、心身共に廃墟と化してしまふ。つきましては正しい信仰理解をもつて、人間と人間は勿論のこと、天も地も人も、天地自然が法華経信仰の力で大調和させなければいけない。法華経の功德をもつて、天変地異などの自然災害や、自分さえ良ければそれで良いという為政者

の慢心な精神を戒めていこう…と覚悟されました。天地神仏の為、国土国民の為に、命を懸けて国の柱や眼目や大船の船頭になつて皆を導いていこうという大慈悲心から、かつての『四月二十八日』の旭日に向かって誓願された姿になつたのであります。

現在、日本国は「東北関東大震災」や「想像を超える大津波」に始まり「福島原発事故」の二次災害、三次災害と続き、政財官界の頼りなさ等を見るにつけ、私達一人一人がシツカリとした精神を確立しなければならぬという思いになります。

日蓮聖人が立教開宗された当時の鎌倉時代の惨状と、いま私達が直面している時代の惨状には、酷似している点も多々あります。

振り返れば、今回の東北から北関東に及ぶ大津波の猛威は、街も村も根こそぎに飲み込み、まさに空爆下のイラクやアフガンのそれと同じでした。三万人に及ぼんとする死者の数も、近代戦の無差別な殺戮（さつりく）と相等しいものでした。老人も乳幼児も区別なく殺す皆殺し戦争の姿そのものだった。肉親と友人知己の絆

を一瞬にして断ち切り、人々の共生の空間を破壊し去った。戦争と地震の違いは、人為と自然の力の相違でしょうかありません。古来人々は、自然のもたらす災害を通して、それを超越的なる意志の働きとみなして、人為への反省や教訓として受けとめてきました。私にはこの事態を「仏教者として」いかに受け止めるべきか、という課題が残されています。この現実と向き合う時、まずは事態認識の「主体」を明らかにしなければならぬという事が言えると思います。と言うのも、新聞各紙、雑誌やマスコミ等どれをとつても、冒頭「謹んで哀悼の意を表します」と述べ、犠牲者の遺族へのお悔やみの言葉が形式通り行われています。後段それぞれが災害に当たって被災した人々との悲嘆の共有を語り、被災者を励まし、残された人々への救援を誓う事で終わっています。

それは、被災者に対しては勿論大切な事です。しかしもう一步踏み込むと見えてくるのが、「生きたい」「生きよう」とする意志と希望を断ち切れ踏みじられた「死者」こそが、この災害の最大の犠牲者であり、問題を担うべき主体である事が忘れられているのではないだろうか？生き残った人々へ真の励ましを送っている主体は、被災地から遠く離れた私達であるわけがなく、失われた故郷の大地に魂をとどめた死者こそが、肉親縁者をはじめ人々へ向かって我が身に替わって「生きよ！」と呼びかけている様に感じます。つまり今回の大災害の全容を受け止め、事柄の隅々までを引き受けているのは数知れぬ死者達だろうと思うのです。その想いを引き受けていく事こそが、真実の哀悼であり、仏様の教える真の「回向」と言えるのではないのでしょうか。

今回の災害は「現代の文明」なるものに挑まれた自然の「怒り」であったともいえましよう。しかし自然が向かった「怒り」の発動犠牲となったのは「無辜(むこ)無罪」の民でした。この不合理を埋めるものは、仏教的なる精神、『法華経』をもって埋め合す外に無いと思います。かつて日蓮聖人は、自然的災害を人為のもたらすものと捉え、社会のいまだ「宗教的精神」の革新を求められました。現代も同じです。『法華経』で《心のエステ》をする時です。『法華経』には、人生の不安を除き、永遠の幸せを感じる方法が示されています。さあ皆で『法華経』を勉強しましょう。毎月『寺子屋』で語り合いましよう。「幸せ」は、《なる》ことではなく、《感じる》もの、《感じ合う》ものです。世の中で起こる困難こそが、真に幸せの花を咲かせる芽であると信じましよう。法華経の大信業者であった宮澤賢治も『世界全体が幸福にならなければ、私個人の幸せはない』と断言しています。こういう時だからこそ、私達が一丸となって協力し、心身共に復興する姿が、犠牲となられた『死者』に対する、何よりの『回向』になるものと確信します。

『日本全体の幸せが、私個人の幸せであり、それが掛け替えのない最上の幸せ』という精神を皆で共有できた時に、私達は既に『法華経』を實踐し、体現している事になるわけであります。私達一人一人が気持ちを一つに（異体同心）、復興させよう『大和魂』調和の心

『法華経の真髓』。願って止みません。

合掌 副任職 谷川寛敬

